DISCOVERY
シコク発見

ゼロ・ウェイスト宣言（ZERO＝0 Waste＝廃棄物）を採択し、持続可能な社会を目指す上勝町※1。
リサイクル率80%を達成するなか、上勝町と連携しながら進めるゼロ・ウェイスト活動の更なる深化について、上勝ゼロ・ウェイストセンターを運営する㈱BIG EYE COMPANYの大塚桃奈さんに話を聞きました。
（上勝ゼロ・ウェイストセンター上空より撮影）

※1　上勝町は、徳島市内から車で約1時間の山間部に位置。2003年、自治体としては日本初の「ゼロ・ウェイスト宣言」採択。

WHY 上勝町ゼロ・ウェイストセンター「WHY」とは？

上勝ゼロ・ウェイストセンター（通称「WHY」）は、老朽化していたごみステーションとリユース施設を発展的にリニューアルする形で2020年に設立されました。新たに交流ホール、コラボレーティングラボ、体験宿泊棟であるHOTEL WHYを併設した複合施設となっており、当社が運営を担っています。

―施設がとても綺麗なことに驚きました。

ごみ特有のいやなにおいがしませんよね。生ごみを受け入れておらず※2、使い終わった包装容器などは洗って持ち込むことを徹底しているためです。「持ち込む」と言いましたが、上勝町はゴミ収集車が走っていませんので、町民自らがごみを運び、ここで45分別しています。また、日用品等でまだ使えるものは併設の「くるくるショップ」に集め、誰でも無料で持ち帰ることが可能です。これらはリサイクル、リユースの促進とコスト削減に繋がっていますが、常日頃から人々がごみやリサイクルを考える機会にもなっているのです。

ゼロ・ウェイストセンター「WHY」外観。
建物には町内の廃材が活用されている。

※2　ごみの約4割を占める生ごみは、コンポストなどを使い各家庭で堆肥処理される。

―地域住民との共創による取り組みですね。

そのとおりです。ほかにも体験宿泊棟である「HOTEL　WHY」では、宿泊者にゼロ・ウェイストの理解を深めて頂くため、ごみステーションなど施設見学のほか、滞在中に出たごみを分別してごみステーションに出す、コンポストによる堆肥処理を体験するといった機会を提供しています。

WHY CEO（チーフ環境オフィサー）として

―大塚さんは神奈川出身と聞きました。なぜ上勝に？

偶然のご縁とタイミングです。「WHY」の施設設計に携わっていた設計士さんと私の家族が知り合いでした。そして、進路を考えるタイミングで「WHY」運営会社の代表取締役の募集があり、声掛けされたのです。見知らぬ土地ではありましたが、もともと色々なコミュニティの方と交流することに楽しさを感じていましたし、私自身、学生時代の留学経験や国内各地の訪問などから環境やまちづくりに関心を持っていたので、サステナブルな社会を目指す上勝町への移住は期待が大きかったですね。実際に暮らしてみて、自然の近さや（留学先の）スウェーデンの「フィーカ」（コーヒーブレイクの文化）にも似た暮らしの余白が感じられるところに魅力を感じています。

―CEOの“E”は「環境」なのですね。

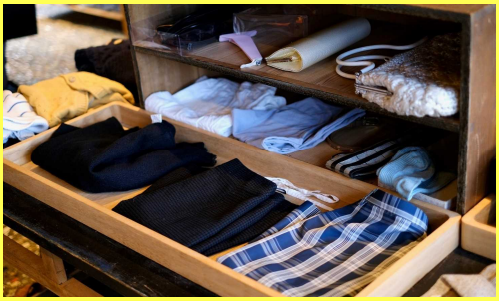
そうです。はじめて暮らす町、はじめての仕事ということで、代表取締役（chief-executive-officer）ではなく、上勝町のゼロ・ウェイストの取組を発信する「chief-environmental（環境）-officer」という立場で関わっています。

①ごみ分別所
②ごみの分別区分ごとにコンテナが並べられ、キロ当たりのごみ処理費用や、資源としての買取価格を明記。なお、ごみは洗ってから持ち込まれるほか、生ごみは各家庭で処理するため、センターではごみ特有のいやなにおいはしない。
③体験宿泊棟「ホテルWHY」外観
④宿泊中に出たごみを宿泊者自らが分別。翌朝、隣接するステーションでのごみ分別や生ごみ処理（コンポスト「キエーロ」）を体験する。食事は町内の飲食店を利用するか、テイクアウトが可能。

―就任して1年半。どのような取り組みを？

製造から廃棄というONE-WAYの流れとは別の「循環の選択肢」を作ることです。ここを訪れた人々とリユースやリサイクルといった選択肢について学び、そこで得た体験やノウハウを情報発信していく。具体的には、既に申し上げたごみの分別やリユース体験などのほか、学生たちと楽しみながら衣類を解体したり、企業と連携しながら衣類の回収・再生プロジェクトに取り組んだり、できるところからはじめています。

今、衣類の解体のことをお話しましたが、そのリサイクルの現状※3はご存じですか？製造段階で環境負荷が低い素材を使う商品はありますけど、再生まで意識した取り組みはまだまだだと思うのです。一番大きいのはお金の問題で、衣類は布やボタンなど色々な素材で作られているため解体の必要がありますし、かさばる割に素材単価も安い。経済目線で廃棄となるところに循環の選択肢を作るには、生産者と消費者、双方の意識変容が必要です。



※3　古着として販売が11%、資源として回収が7%、可燃ごみ、不燃ごみとして廃棄が68%と、再利用、再資源化に回る割合はわずかなのが現状。なお、衣服を廃棄する理由のほとんどは、「手間や労力がかからない」とされている。
■出典:環境省ホームページ
(https//www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/)

WHY 原体験が得られる場所

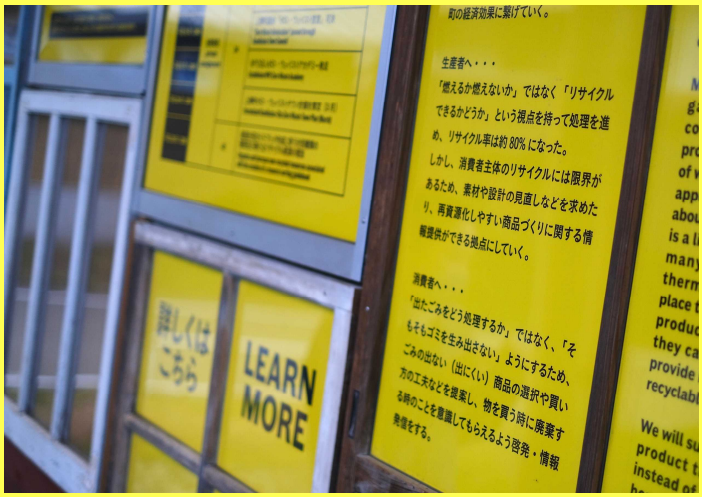
―意識変容、必要なこととは？

例えば普段の生活で、ごみはあまり意識されませんよね。決められた場所に出せば回収される。でも、ここでは自分でステーションにごみを持参して45分別しなければなりません。コンタクトレンズは、パッケージのプラスティックとアルミのふた、レンズの3つに分けなければならないと知りますし、ごみ処理に掛かる費用や資源としての価値もわかる。普段意識しないことへの気づきこそ意識変容の第一歩になるのです。先日、ゼミ合宿でここを訪れた大学生は、「安易にモノを買えなくなった。全部ゴミに見える」って言っていました。一見、ネガティブにも聞こえますが、(購入時点で廃棄を意識するという)消費行動に関わる衝撃が生まれたのは凄いことだなと。

― 一人一人の気づきが出発点なのですね？

そうです、気付きを生むこと。留学時に感じたことですが、海外では「WHY」＝なぜ自分がそれをするのか？が

敷地内のくるくるショップにて。取材者もグラスを持ち帰りました。



●Why do you buy it(なぜ買うのか)
●Why do you throw it(なぜ捨てるのか)
●Why do you produce it(なぜ作るのか)
●Why do you sell it(なぜ売るのか)

来訪者が「WHY」を学び合う場として、コラボレーティング・ラボラトリが活用されている。

繰り返し問われるのです。日本では「WHAT」とか「HOW」＝手段が先ですよね。私たちは、ここを訪れた人に「なぜ」を問いかけていきたい。正解を持っているわけじゃないのですが、「なんで洗わなきゃいけないの？」といった些細な疑問から、量り売りといった消費行動の変容に繋がることもある。こうした変化がきちんと社会に繋がるようにしたい、その導線を提示したいと考えているのです。

WHY 2030年、そしてその先に向けて

―上勝町は新ゼロ・ウェイスト宣言を採択しました。当センターはどのように発展するのでしょうか？

【新ゼロ・ウェイスト宣言】
①ゼロ・ウェイストで私たちの暮らしを豊かにします。
②町でできるあらゆる実験やチャレンジを行い、ごみになるものをゼロにします。
③ゼロ・ウェイストや環境問題について学べる仕組みをつくり、新しい時代のリーダーを輩出します。

上勝町ホームページ

まだ検討中ですが、主に環境教育と企業連携の取り組みを深化させていくことになると思います。上勝町はこれまで約18年間にわたり、リサイクルできるかどうかの視点でごみを減らす活動を続けてきました。しかし、例えばごみの45分別についてみると、現時点のベターチョイスであっても実際には負担に感じる町民がいることも事実で、ベストだとは言い切れない。プラスティックや紙など資源循環のあり方として、10年後、30年後、さらには100年後、どういう形が上勝町や社会にとって理想なのかを訪れる人と一緒に考え、啓発や情報発信を続けていくことが必要だと思っています。そして、様々な企業様とも連携しつつリユースやリサイクルに繋がる仕組み作りに挑戦していきたい。

つまり、このゼロ・ウェイストセンターWHYは「プラットフォーム」なのです。人々の行動変容のための原体験が得られる場所として、また多様な人や企業の方々とともにアイデアをカタチにしていく場所として発展させていきたいと思います。

（※掲載内容は2021年12月現在のものです）

※写真撮影のためマスクを外しています

取材を終えて・・・

ごみの45分別という大きな取り組みは、地域が一丸となって実現されているのだと感じました。消費者だけでなく生産者の意識も変わることが重要だとわかり、普段何気なく捨てているごみとの向き合い方を考えるきっかけになりました。　（四国財務局（本局）理財課・遠藤　龍希）

ごみをテーマにゼロ・ウェイストセンターが交流の場となり、大塚さんをはじめ多様なバックグラウンドを持つ人が集まっていることに、町の持続可能性を感じました。
ネットでモノが簡単に手に入る時代だからこそ、買ったものがどうなっていくのかを意識しながら消費を楽しみたいと思います！　（徳島財務事務所 財務課・西尾　俊史）